

苛いらつ付ついている。其その事ことさえ意識いしきしていない。

先さき程ほどの暴言ぼうげんが頭あたまに浮うかぶ。

家事かじくらいちゃんとやれば？

家事かじが自分の仕事しごとだとは考えない。母親ぼとけは、母親ぼとけなのだから、家事かじをすべきだ。当然たうぜんの論ろんが臍ぞうふ腑ふにおちる。疑うたがったことさえない。だから夫それを破やぶる母ははを怠慢たいまんと見た。綏すいはドカリと自分の椅子いすに座まった。玄関げんかんでゴソゴソと気配きはいがして、扉かどの開ひらく音ねがした。

母ははが出て行いったのを確認かくにんして居間いまに戻る。

兄あには早々はやはやと弁当屋べんとうやのチラシを見みていた。今日の晩ばんご飯ごはん。

「おれはカツ丼かつどんにするけど、お前まへどうする？」

「おれもカツ丼かつどん」と答こたえてテレビを付つける。

不貞腐ふてくされていた。なぜ、母は男と旨うまい飯をくって、自分達は弁当をたべなければいけないのか。何度同じおこことが起つても納得行かない。男と出かけるのが悪いと言っている訳ではない。母は離婚していて、独り身で、だから倫理的な問題を云々うんぬんする積つもりはない。しかし夫なら、家事を最低限こなしてから行くべきではないのか。綏すいの最低限とは自分が生活できる範囲、つまり家事の略凡ほぼすべてを意味していた。

「おい、今日はおれがカツ井の日だろ」声をあげる兄に聞きこえない佯ふりをした。すぐとなりについて聞えない訳はないが兄は「ったく」といつて再びチラシに目を向ける。母が置いていったのは千円であり、カツ井は五百二十円するので毎回交代で食たべるとというのが兄弟のルールだった。綏すいは夫それを破やぶって置きながら罪悪感を感じなかった。

自分が抱かかっている感情を嫉妬とよぶことに、綏すいは気づかなかつた。母が母以前の女に戻ることが、許ゆるせない丈だけだった。母が休やすみな

く仕事をしていること、毎日の洗濯、隙ひまを見つけての掃除をしている事は、勘定に入れなかった。していることより怠慢そのが目についた。だから其怠慢を挙げれば、母を非難する立場、自分は非難されない立場に、いられた。

綏すいは母の彼氏、恋人に、会った事があった。

若い燕、などというものでなく、年相応の、母に合った、男の人だった。綏すいは彼に挨拶しなかった。幼おきなさのせいとも、愚かであるとも、思わなかった。

### 「ぼくの夢」

綏すいは心の中で読んだ。ぼくの夢は、お父さんと、お母さんがなまよくなって、みんなできあわせになることです。この部分くだりに来ると赤面した。自分が書いたものと思えなかった。小学校三年生の時に書いた作文で、此頃このには、父と母が不仲になっていたことを思い起おこさせた。

父と母がいつから左右そなっていたかは分わから

ない。只父は烟りの様に消えた。何年も後で、兄に其話しをすると、少しずつ荷物を運んでいったよと言われた。綏には其記憶がない。もつと詳しく話しをきこうと思ったが、兄弟の間でも、その話しをするのは憚られた。

どうして父がいなくなったのかを綏は知らない。どの様にいなくなったのかも、知らない。只もう父がいらないんだという事だけは理解した。其理解の過程も分らない。只綏は其現実に順応した。或は順応しようと力めた。

友達の家から帰ると、偶然母に会った。母は「あら」と言った。綏は気づいたが連れ立って歩くのが恥しく、母が持っていたスーパリーの袋を奪うとずんずんと先に歩いた。袋は重かった。働らくこと、其後の疲れ、なに一つ知らない綏は其重さ丈厄介に感じた。

先に家に着くと、適当な所に袋を置いた。テレビを見様と居間に向うとガチャリと音がした。振向くと袋から卵が落ちていた。十個入りの、一つずつがプラスチックに入った卵は、

うち二つが割れていた。母が帰ってくる。「ごめん、卵」お帰りより先に言った。母は夫を見てから「もったいないから、焼いて喰べちゃおう」と玉子焼を拵らえた。「ありがとね」とも言った。綏は母が決して自分を責めないこと（仮令自分がどんなに詰っても）にも気が付かず玉子焼を旨いと思つて食べた。

母の晩御飯はおいしかった。だから、作つて欲しいんだとは、言えなかった。

また喧嘩をした。気が腐々する。今日は作る積だったけど、残業になつて仕舞い、ご飯を作れなかったそうさ。母は仕事が終わつて其儘男に会いに行った。電話で其事を告げられた綏は、「ああそう」と言い乱暴に受話器を置いた。左右すれば怒りの一端は伝わる筈と思つた。

又弁当を買つて来て、綏は、兄に言った。

「兄ちゃんは何にも思わないの？ あの人の（母）、寿司食つたり、天麩羅食つたりして

んだってよ、この前酔っ払って帰ってきて言  
ってた。んでおれ達五百円の弁当かよ。おか  
しいと思わない」

兄はテレビを見ていた。顔もむげずにいう。

「お母さんがしあわせになんならいいんじ  
やない」

綏は苛烈いらついていたのでなにも思わなかつ  
た。飯を食べ、風呂に入ると、母と自分の不  
公平を思い怒りが復ぶり返した。タオルで髪を  
拭ぬいていると洗濯物を取り込んでいないこと  
を思い出した。ベランダに出て室へやに仕舞しまって  
ゆく。天気の良い日で、夜空の星が、目に着  
いた。家からの景色は、好よくはなく、空も満  
天の星には程遠かった。兄が言ったしあわせ  
という単語を思い出した。ぼくの夢。綏すいは気  
づいた。あの夢は、叶なかなかつたけれど、ま  
だ、凡すべてが叶なわない訳わけじゃないんだ。

綏すいはくしゃみをつした。明るい室へやに戻り、  
中から、鍵を閉めた。